

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 長谷川 暁人

論 文 題 目

持続への回帰 —ベルクソン「持続」概念の探究—

論文審査担当者

主査 名古屋大学 教授 田村 均

委員 名古屋大学 教授 金山 弥平

委員 名古屋大学 教授 宮原 勇

委員 名古屋大学 准教授 吉武 純夫

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の概要】

本論文は、「持続 *durée*」というベルクソン哲学の中心概念を取り上げ、複数の著作において持続がどのように語られているかを検討し、さらに、記憶および言語という二つの主要な論点について、ベルクソンが持続を基軸としてどのような哲学的主張を展開したのか考察した論文である。

第1章は、持続、および、持続を捉える方法としての直観、そして、直観を方法として用いる哲学、という三つの論点を通じ、持続に関する基本的な理解を確立する。持続は、『意識の直接与件』（1889）においては、意識の内面に現れる感覚や感情といった質的体験のことを言う。『物質と記憶』（1896）においては、意識の時間的な積み重なりとしての記憶のことを言う。さらに『創造的進化』（1907）においては、動物的本能から人間的意識までの連続的な進化過程の背後に控えている生命の創造的な運動のことを言う。直観は、一種の共感を通じてこの持続を捉えるベルクソンの哲学的方法であり、分析と計量によって物質を捉える科学的方法とは峻別される。哲学は、物質を対象とする科学と、精神を対象とする形而上学を、直観によって統合する立場として設定されるのである。

第2章は、『物質と記憶』に沿って、ベルクソンの記憶論と習慣論を扱う。ベルクソンは、意識が会う世界を、表象と物質の中間様態を成すイマージュの総体として定立する。意識体験は現在における知覚というあり方では完結しない。持続における純粹な過去が、記憶イマージュとして私たちに立ち現れる。この、想起としての記憶は、身体の運動機構に残存した過去である習慣 (*habitude*) とは区別され、物質性 (身体性) を伴わないとされる。ここからベルクソンは、失語症の症例と言葉の記憶に関する当時のブローカやウェルニッケの説明を批判し、記憶が脳に局在的に蓄積されるとは言えない、という主張を展開する。ただし、習慣は、ベルクソンにおいても一概に否定的に評価されるわけではなく、技芸を習得する場合のような意志にもとづく習慣の形成および更新、また意志の注意を継続して意識的に持続に立ち返る習慣は、能動的習慣として高い評価が与えられるのである。

第3章は、主として『思想と動くもの』所収の諸論文に沿って、持続と言語表現の問題を取り上げる。持続は、基本的には質的な連続性とその体験である。一方、言語は連続的な体験を分割し、名付け、固定化する装置である。それゆえ、持続を言語化すれば、持続は寸断され、変質する。持続は言語化を拒むのである。だが、哲学者は言語を使用しないわけにはいかない。哲学書を読む時には、抽象的な言語の根底にある書き手における持続の直観に向かって読み進めるべきであり、書く時には、抽象的概念ではなく、むしろ的確な比喩によって、自らの直観した持続を暗示するべきなのである。ベルクソンは、このように、比喩を通じてのみ、語りえぬ持続の体験が表出されうるとし、哲学的な言説と比喩に関する考察を深めたのである。

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の評価】

本論文は、ベルクソン哲学の核心にある「持続」という概念を検討し、ベルクソンにおいて、科学的認識とは本質を異にするものとしての哲学的な世界認識が、持続をめぐってどのように語られ、深められていったのか考察したものである。

本論文に関し、第一に評価すべき点は、持続という多義的な概念を複数の著作において正確に把握する、というベルクソン解釈の基礎作業を忠実に実行し、これを通じて、持続一元論とも言うべきベルクソン哲学の特徴を的確に描き出した点である。持続はベルクソンにおいて様々な含意を持つが、本論文は、意識の質的体験、非物質的な記憶、生命の進化的な力(生命の飛躍 *élan vital*)、という三つの相貌でそれを捉え、ベルクソンの唯心論的な立場の広がりをつかみ上げさせている。

第二に評価すべき点は、失語症の生成機序の説明に対するベルクソンの批判を取り上げて、ベルクソンが、人間的記憶は物質とは別の秩序に属する、という固有の立場を表明するに到った根拠を明示し、記憶の脳局在説を批判する古典的な議論の骨格を示した点である。本論文は、言葉の理解はあるが音声の出力ができない失語症(ブローカ失語)、および音声の出力はあるが言葉の理解が伴わない失語症(ウェルニッケ失語)に関し、ベルクソンの所論を整理し、これらが身体運動と記憶の連携の破壊に過ぎず、記憶が脳に貯蔵されていることは意味していないという論点を取り出して、ベルクソンの記憶論が当時の科学的説明への有効な批判に立脚することを示した。

第三に評価すべき点は、持続の直観とその言語的表現との間に根本的な矛盾があるという、従来からベルクソン解釈において指摘されてきた問題を取り上げ、ベルクソンの比喩論および詩論を検討することを通じて、この問題に対してベルクソンの哲学的主張と両立する形での対応が可能であることを示した点である。本論文は、ベルクソンの比喩論の先行研究が少ないなかで、レイコフとジョンソン、佐藤信夫、佐々木健一らの比喩一般に関する研究を参照し、ベルクソンは、意味の通常の輪郭を崩して意味を考えなおすことを促す、という比喩の特性によって、持続の体験を語りうるものと見なすことができた、と指摘する。

以上は本論文に関して評価できる点であるが、批判すべき点もある。第一に、持続という概念を複数の著作に渡って綿密に見てはいるが、統一的な解釈を提示するまでには到っていない、と指摘できる。第二に、持続という概念は、アリストテレスの自然学にまで遡りうる概念だが、そのような哲学史的な展望が不足している、と指摘できる。第三に、訳文や訳語の適切性、文献表の整理、といった点で改良の余地がある、と指摘できる。だが、これらはいずれも今後の研鑽によって十分克服可能な瑕疵であって、本論文全体の価値を損なうものではないと判断される。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士(文学)の学位を与えるのにふさわしいものと判定した。